歴史地理学　44－5（211）22～37　2002.12

# 19世紀末の横浜外国人居留地の景観

## ――「横浜真景一覧図絵」からみた土地利用状況――

乙　部　純　子

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．横浜の開港と絵図，史料について
(1)　横浜と日本の開市・開港場
(2)　開港から居留地撤廃までの横浜図
(3)　「横浜真景一覧図絵」の概要
(4)　「日本絵入商人録」の概要
(5)　「横浜諸会社諸商店之図」の概要
(6)　彩色絵葉書（彩色写真）について
Ⅲ．「横浜真景一覧図絵」の図像表現
(1)　絵図の図像分類
(2)　「日本絵入商人録」「横浜諸会社諸商店之図」と写真等と「横浜真景一覧図絵」中の図像との対応関係
Ⅳ．「横浜真景一覧図絵」にみる居留地の景観構成
(1)　商館・店舗の立地
(2)　倉庫・作業所の立地
(3)　住居を兼ねた店舗の立地
(4)　住居の立地
Ⅴ．むすびにかえて

### Ⅰ．はじめに

安政6年6月(1859年7月)，幕府が締結した諸外国との通商条約により，横浜は開港した。同年3月の絵図とされる「武州横浜開港見分之図」[1]は，横浜開港場を中心に描いた鳥瞰図としては最も古い時期の絵図のひとつである。ここには，東海道沿いに多くの建造物が描かれており，往来が多かったであろうことがうかがえるのに対し，港が建設される予定地は閑散としており，背後には新田が広がっている。「横浜」はその名が示すように，大岡川河口に形成された砂州上の，半農半漁の寒村であったことを，この絵図から読み取ることができる。しかし開港場の建設が始まると，横浜は急速に都市としての形を整えていく。その中には日本人町があり，外国人居留地（以下居留地と記す）があった。横浜の貿易港としての成長と共に，居留地はその範囲を広げ，撤廃までの約40年の間に独自の景観が形成された。その様子は1891年の「横浜真景一覧図絵」[2]に詳細に示されている。

横浜をはじめとする近代日本の開港都市あるいは居留地について，その構造や景観について体系的に論じた歴史地理学的研究は少ない。これまでに都市地理学の立場から藤岡[3]は1885年の横浜と神戸の都市構造を，居留地との関わりで検討している。また，尹[4]は神戸居留地が現在の都心となる過程を明らかにするための時系列的研究として，1868年以降明治末までの居留地の内部構造の変化を考察している。しかしこれらは都市構造や都市形成に重点がおかれたものであり，景観そのものについて述べたものではない。

開港都市として急速に都市化した横浜を検討する際，土地利用状況とその変容をとらえるためには当時の都市景観そのものを解明す

**キーワード**　「横浜真景一覧図絵」，尾崎冨五郎，横浜外国人居留地，景観，19世紀末

る必要がある。しかし横浜の場合，関東大震災と大空襲により多くの資料が失われているため，大きな通りに面した建造物や写真に撮影された場所の景観については明らかであるが，中小規模の建造物についての情報は限られている。そうした資料的制約の中で，いまだ十分に活用されていないと考えられるのが，絵図類である。

絵図は地図とは違い，地表を測量結果に基づき正確に描いたものではないが，絵図作成者の主観的な認識や知識が盛り込まれており，これらは絵図の鑑賞者にも伝達されていく。絵図を分析することにより，作成時に把握されていた地域が明らかにされるとともに，人々が持つ地域イメージも読み取ることができる。

横浜では開港前から新田開発に関わるいくつかの絵図があり，開港後は港・横浜を伝えるべく，浮世絵師による絵図が残されている。明治維新以降は，近代地図的描法を導入した図が数多く出版されるようになる。

本稿であつかう「横浜真景一覧図絵」が発行されたのは，横浜居留地の造成が完了し，その景観がほぼ固定的になったと思われる1891年である。すでに実測図が刊行されており，近代的手法を導入した民間の案内図も数多くみられ，中心的な建造物や通りについては当時の様子が判明する写真がある。しかし刊行されていた図は平面図であり，記号で示された図からの景観復原は困難である。また写真が広く普及する前の段階であったため，写真のみから全体の景観を復原できるほどの数は存在しない。以上の点で，居留地内の建造物や事物が詳細に描かれた絵図を用いて景観を読み取る，という試みを行うには，時期的にみて適しているといえよう。

本稿では「横浜真景一覧図絵」を主たる分析対象として，銅版画や写真などと比較検討し，絵図中のコードを読み取ることにより，絵図作成当時の土地利用状況を解明することを目的とする。

## Ⅱ．横浜の開港と絵図，史料について

### (1) 横浜と日本の開市・開港場

横浜は安政五カ国条約により開港することになる。この条約では，五港の開港場と二都の開市場[5]が開かれることが決められていた。しかし幕末から明治への移行という日本国内の政情もあり，それぞれの開港，開市の時期は異なり，また開港後の開港場の形態は様々で，外国人の居留の形態も都市により異なっていた。

鎖国期の海外の門戸であった長崎では，オランダ人を出島，中国人を唐人屋敷に囲い込み，貿易統制し，日本人と接触がないよう厳しく監視していた[6]。開港場として条約上にその名があげられて以降，幕府は大浦湾を埋め立てて居留地を造成しようとするが，期日までに間に合わず，暫定的に雑居を認可せざるを得なかった[7]。

一方，長崎と同じ1859年に開港した箱館では，開港時にはまだ居留地が設定されておらず，雑居状態であった。1861年に「箱館地所規則」が締結され，居留地の造成が計画されるが，1867年にはそれは廃棄となり，以後雑居が定着し，居留地は名ばかりのものとなる[8]。

神戸は，1868年に開港する。条約で「兵庫」となっていたものを神戸に居留地を造成したが，開港が明治への移行と重なったため居留地の建設が遅れ，外国側からの雑居地の要請が強く出された。この「応急処置」として承認した雑居地が，居留地建設後も永続的なものとなっていった。また，神戸では居留地撤廃まで自治行政が存続した[9]。

神戸と同様，自治行政が居留地撤廃まで存続した大阪は，条約上で「開市場」であったが，諸外国からの圧力により「開港場」と改められた。神戸での貿易が盛んになるにつれ，貿易港としてのその立場は次第に弱くな

り，代わって宣教師たちが移り住み，宗教色の強い街へと変化していく[10]。

大阪とともに開市場となった東京では，開港場に変更されはしなかったが，雑居地と共に条約の規定にはなかった居留地が設置された[11]。

日本海側に唯一設置されることになった新潟では，開港当初に若干の外国貿易が行われたに過ぎず，外国人の居留がほとんどない状態で，開港場自体がないに等しいものであった[12]。

日本最大の開港場に成長する横浜では，条約上で開港されるのは神奈川となっていた。しかし，開港場と居留地の設置・建設について，幕府は条約を拡大解釈した主張，つまり開港場を横浜にする，を押し通した。横浜で開港場と居留地の基礎建設を行ってしまい，開港場としてのいわば既成事実を作り上げてしまったのである。欧米諸国は当初これに抵抗したが，商人たちの地理的条件にすぐれた横浜への流入は止めることができず，認めざるを得なくなった。以後居留地撤廃まで，横浜居留地において，欧米諸国は完全に独立した行政機構を作り上げることはできず，日本側は主導的な地位を保つことができた[13]。

日本における開市・開港場の中で，横浜は早い時期に開かれた港の一つである。その後開港していく諸都市の規範となるべく，試行錯誤しながらも横浜は，日本を代表する港としての地位を着実に築いていったといえる。

(2) 開港から居留地撤廃までの横浜図

横浜では，新田開発に関わる絵図から開港期と開港後の街の様子を描いた鳥瞰図，案内図等，多くの絵図・地図等が残されている。これらのうち，開港から居留地撤廃までの時期の横浜図は，以下のように分類できる[14]。

A　鳥瞰図的描法の絵図

開港をきっかけに，浮世絵師たちにより横浜の風俗や風景，風物などを題材とした絵画や絵図が描かれた。いわゆる「横浜絵」[15]である。この中に鳥瞰図的描法で横浜開港場の景観を描いたものが多く見られる。特に五雲亭貞秀[16]は数多くの絵図を描いており，横浜の町並を詳細に伝えている。鳥瞰図的な絵図の出版は開港後10年余りの間みられ，そのピークは1860～61年頃である。

B　平面図的描法の絵図

a　真景図・明細図

平面図的描法を中心にしながら鳥瞰図的な描法が併存する図[17]で，多くが浮世絵師により描かれている。ほとんどが開港から約10年程の間に発行されている。

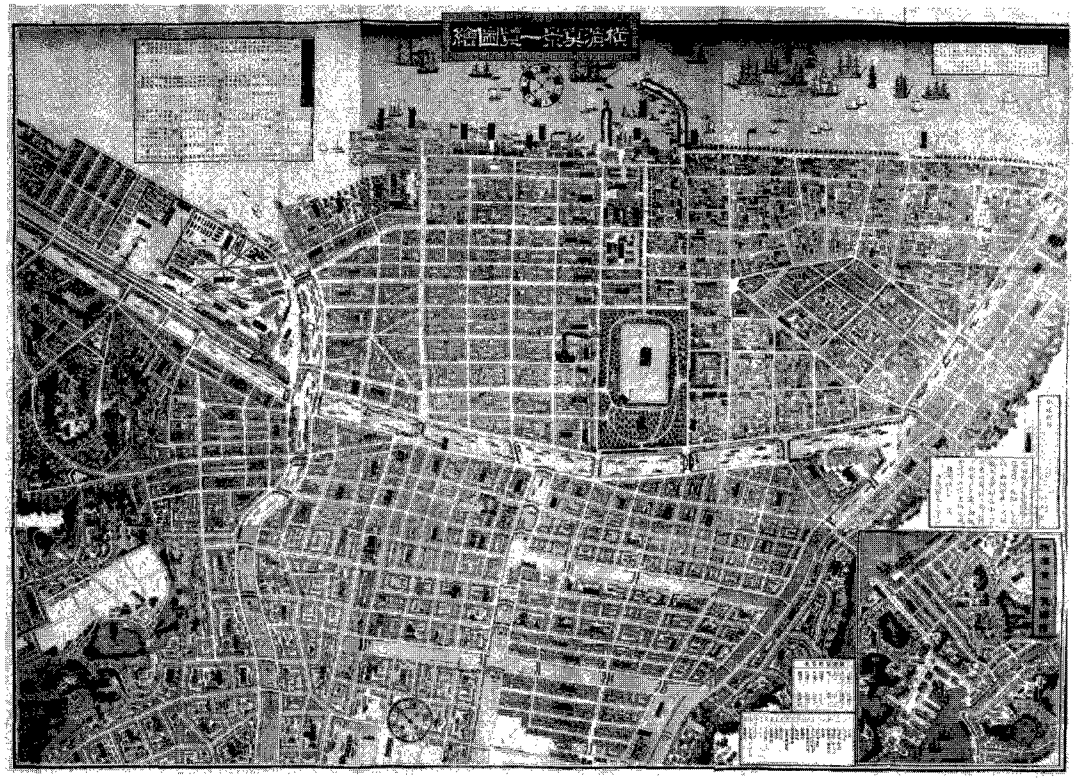
b　案内図

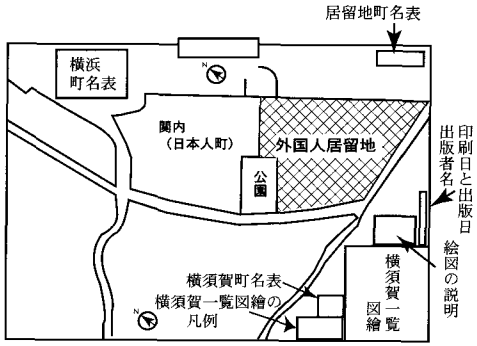
1870年明治政府の依頼によりブラントンによる「横浜居留地地図」[18]が刊行されたと同年，尾崎冨五郎により「新鐫横浜全図随時改刻 map of yokohama」が出版された。この図は，近代的描法が取り入れられた最初の図と評されている[19]。主図のほかに多くの情報を盛り込んだ図で，これ以降，同様の形式をもつ案内図が出版される。年ごとに図に盛り込まれる情報は，取捨選択されていく。1882年になると，名所絵を挿入した案内図がみられるようになる。

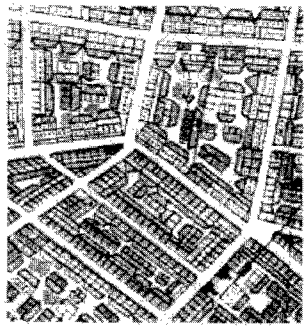
本稿であつかう「横浜真景一覧図絵」は，近代地図的描法が取り入れられた後の，平面図が主流になった時期に作成された図である。この時期にはなされなくなっていた建造物の景観表現が詳細に示されており，内容的には鳥瞰図的描法に近い絵図であるといえる。

(3)「横浜真景一覧図絵」の概要

「横浜真景一覧図絵」（図１）は，1891（明治24）年，尾崎冨五郎によって描かれた銅版画である。図中右側の説明にもあるように「風船ノ上ヨリ望シ市中ノ景色名所」を描いた横浜市街の地図であり，描かれているのは北は現在の桜木町駅附近，西は黄金町附近，南は真金町附近，東は元町と山手居留地の一部



部分拡大図

**図1**　「横浜真景一覧図絵」（尾崎冨五郎，1891年）

までの範囲である。山手居留地や野毛の地形表現は詳細で，海には多くの船が描かれている。絵図の右下には横須賀の市街について「横須賀一覧図絵」として，それぞれの建造物に赤枠で説明をつけて掲載している。

絵図中には左上に横浜町名表，右上に居留地町名表，右下に横須賀町名表，図上部中央の表題の真下と下部左寄りの二ケ所に方位が記載されているが，注については横須賀の図にのみ記載され，横浜にはみられない。日本人が居住している地域には通りの名称が付され，ランドマーク的な場所や町名は赤枠で名称が記されている。居留地内では通りの名称は見られないが，税関，波止場，警察署，公園には赤枠があり，それぞれの名称が示されている。また外国領事館には各国の国旗が描かれている。地番毎の区別としては黒の線が引かれているが，全てに引かれているわけではない。Japan Directory[20] に収録された地図と比較すると，街路割が異なるところもみられる。

尾崎はその人生の中で，多くの横浜の絵図を手掛けている[21]。「横浜真景一覧図絵」までの尾崎の絵図には詳細な建造物の記載はないが，ここには詳細な建造物の様子が描かれており，開港後に浮世絵師たちが描いた横浜の絵図を回顧したようにも思われる作品である。

(4) 「日本絵入商人録」の概要

「横浜真景一覧図絵」と対比させる資料として，居留地の景観を示す「日本絵入商人録」（以下商人録と表記）がある。

商人録は，1886（明治19）年6月，発行者佐々木茂市[22] により出版された。横浜と神戸の居留地の，外国の貿易商や商店等を絵入りで表した銅版画で，横浜関係64図，神戸関係25図が収録されている。序に「外国人と商取引をするときに必要な情報を記して，内外商売の公益に供したい」とあり，販売の対象が貿易商人であったと想定できる。各図には日本語・英語で記載された会社名，地番と通りの名称，事業内容が示され，会社により取扱の品やトレードマーク，本社の建造物を掲載しているものや作業所の様子を描いているものもある。

凡例には，家屋の絵図は予約募集によって制作されていること，絵図は応募していない人もいるので不完全であること，予約順に絵図を編集していたので居留地の番地順に従っていないこと，予約の開始は明治17（1884）年7月からで既に20か月が経過していること等が示されている。

(5) 「横浜諸会社諸商店之図」の概要

日本人街の景観が判明する資料として，「横浜諸会社諸商店之図」をあげる。

日本人の会社・商店の図は「横浜諸会社諸商店之図」と称されているが，原題は不明で，現在本の体裁をとっているが，製本は個々の所有者によるものである。図は会社・商店の建造物が中心ではあるものの，中には個人の邸宅が描かれているものもある。

全部で104図あるが，横浜としては当然の事ながら貿易に関連したものが多い。また生糸・茶を取り扱う業者，銀行，両替商などの金融業が掲載されている。絵入商人録同様，広告的性格を備えた絵入りのディレクトリーとして編集されたと考えられている[23]。

(6) 彩色絵葉書（彩色写真）について

絵図と対応させる上で最も客観性が高いと思われるが，写真に写されるようなところは限られ，全体を網羅するほど存在しない。また，写真が普及するには至っておらず，写真の数もそれほど多くなく，年代が判明しないものも多い。したがって，写真や写真に着色を施した彩色写真，写真から作成された彩色絵葉書が存在し，年代と場所が明確に判明するものに関しては，絵図と対応させていくこととする。

## Ⅲ.「横浜真景一覧図絵」の図像表現

### (1) 絵図の図像分類

「横浜真景一覧図絵」には豊富な建造物の図像表現がみられ，居留地内部の景観を活写した趣がある。しかし，実測図の系統に属する平面プラン中に埋め込まれた図像群であるから，風景画・鳥瞰図的な図像表現とは全く異なるものであり，一部に特徴的な形態を描いた図像もみられるが，絵図的な類型表現が卓越していることは当然である。

建造物の描き方には，正面観と斜方観がみられる。図の大部分が正面観であるが，ステーション（図中ではステンション）等，絵図中の12地点[24]で斜面像が描かれている。

図中には多くの着色がなされている。建造物については，概ね茶色と薄い灰色，黄色が用いられている。屋根はほとんどが薄い灰色に着色されているが，何本もの線が入れられているため，灰色にみえる。建造物関係のほとんどが一階建てもしくは二階建てで，壁面の着色では両階とも薄い灰色か茶色，黄色の着色，一階部分が茶色で二階部分が薄い灰色の着色がみられる。

建造物の他に，樹木や植生，柵の表現がある。樹木や植生は居留地等，建造物が林立している場所では，その隙間に黄緑色を置くように，絵図の周辺部では詳細な植物の表現があり，その上に黄緑色をのせるようにして描かれている。柵は主に居留地にみられ，長方形に何本もの縦の線をいれた形で描かれており，その上に薄い灰色で着色がされている。建造物の屋根と同様の表現である。

いま，これらの建造物表現の類型を抽出すると，表１のようになる。

一階建ての図像には，四つの形態がみられる。一つ目は壁面に窓のような装飾があるもの（a），二つ目は柱のような線が入ったもの（b），三つ目は扉状の表現があるもの（c），四つ目は扉状の表現と窓のような装飾が両方ともみられるもの（d）で，それぞれに茶色の着色があるものと，薄い灰色の着色あるものとがみられる。ａには日本人町のみにみられる，窓が一つで逆Ｖ字の屋根をもつもの（a′）があり，着色はされていない。

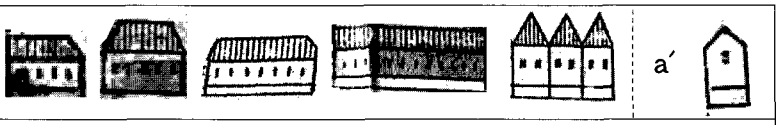
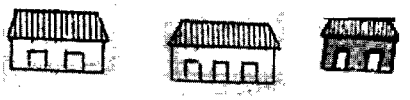
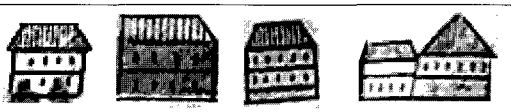
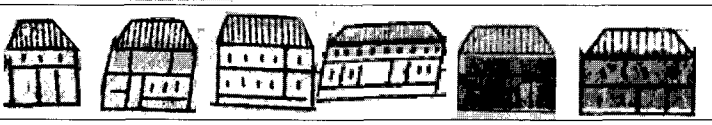
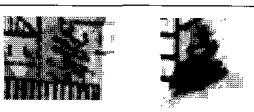
二階建ての図像では，独立建造物として描かれているものと，長屋のように連続的に描かれているものとがある。前者の壁面に描かれた表現には，両階ともあるいはどちらか一方の階に窓のような装飾がある（e），両階ともあるいはどちらか一方の階に柱のような装飾がある（f），どちらか一方の階に窓，他方に柱のような表現があるか，窓や柱のような表現が両階ともにある（g）の三つのタイプがみられる。これらの図像では，窓や柱のような表現の仕方が一つ一つ異なる。また屋根の形はほとんどが台形だが，三角形のものもみられる。それぞれに壁面に茶色や黄色，灰色の着色があり，ｇでは２階部分のみ茶色で着色したものがある。

後者の長屋的に連続した表現がされた図像は，窓のような表現はなく，横に線がはいっただけのもの（h）と，いくつかに区切られているものがある。区切られているものでは，全部茶色の着色が見られる図像（i）と一階は茶色の着色，二階はうすい灰色の着色がされている図像（j）がみられる。なお，全体を通して図像の下部に線がひかれているものがみられるが，ステップなどを表現しているものとみなし，表現の類型としては反映させていない。

これらのうち，ａ，ｂ，ｃの図像は絵図全体でみられるが，a′とｉの図像は概ね日本人が居住する地区にみられ，ｄ，ｅ，ｆ，ｇ，ｈ，ｊの図像は，概ね居留地でみられる。これらの描き分けは何を示そうとしたのだろうか[25]。

### (2) 「日本絵入商人録」「横浜諸会社諸商店之図」と写真等と「横浜真景一覧図絵」中の図像との対応関係

**表1**　「横浜真景一覧図絵」の図像分類

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一階建て | | 窓表現あり a |  |
| | | 柱表現あり b | |
| | | 扉状表現あり c |  |
| | | 窓扉共に表現あり d | |
| 二階建て | 個建て | 窓表現あり e |  |
| | | 柱表現あり f | |
| | | 窓柱共に表現あり g |  |
| | 長屋的 | 灰色着色 h | |
| | | 茶色着色 i | |
| | | 一階のみ着色 j | |
| その他の表現 | | 柵・塀 | |
| | | 樹木・植生 |  |

それぞれの図像がもつ意味を解明するため，商人録，「横浜諸会社諸商店之図」と写真等にある建造物と図像とを対比することにより考察したい。なお，「横浜真景一覧図絵」と商人録，「横浜諸会社諸商店之図」の間には若干の時間的な差があるため，Japan Directoryを用いその記載内容と，新聞記事[26]を確かめたが，景観に大きな変化がみられる

ような建造物の変化や災害はなかったため，それぞれは比較検討にたえうるものであると判断した。以下で居留地（図２）を中心に，絵図を検討していく。検討した場所はこれらの資料から対比しうる，絵図の全範囲にわたるものであるが，紙面の都合上すべてを掲載することは困難であるため，できるだけ多くの図像の事例を明確に示すことができる場所をとりあげた。

A　居留地

居留地では商人録と写真，彩色絵葉書を用

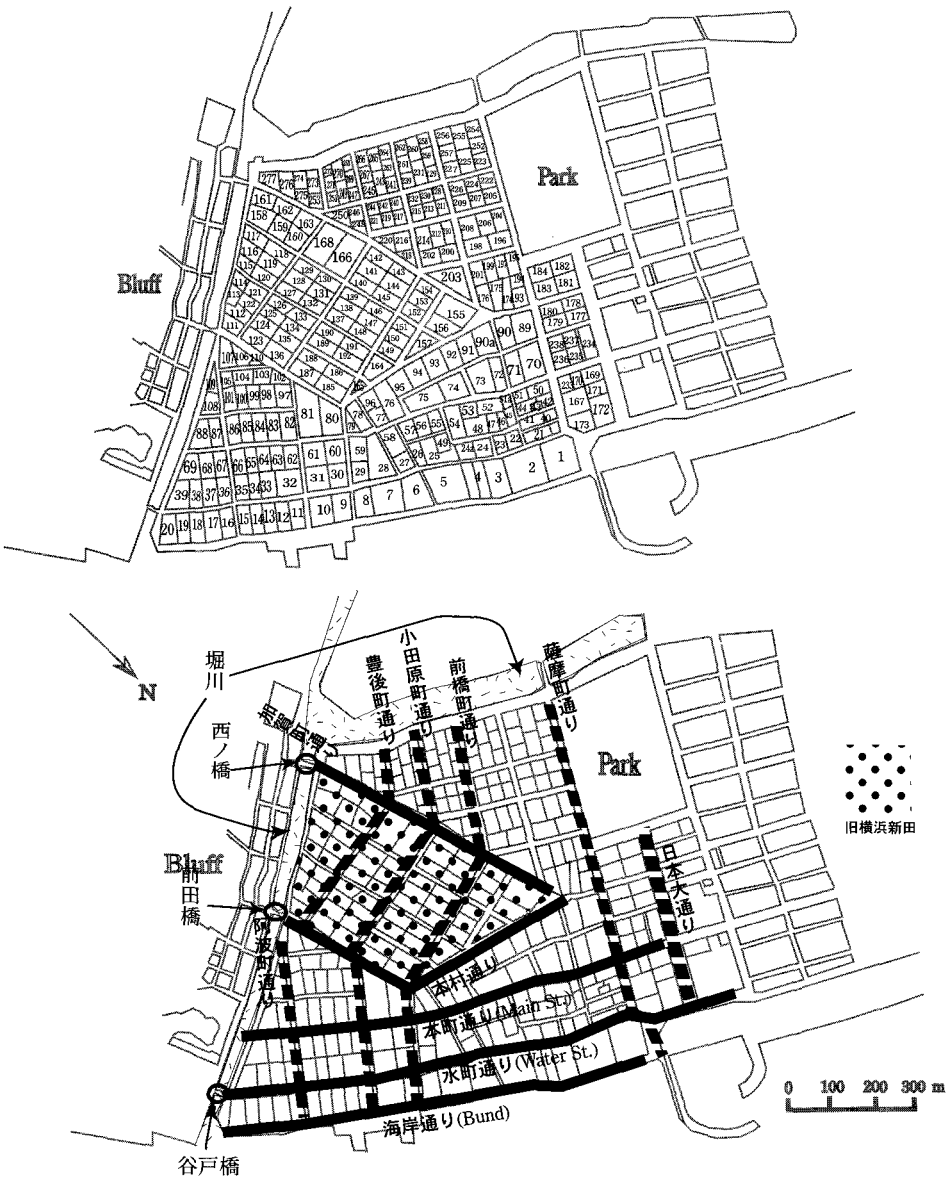



**図２**　横浜居留地の地番と通りの名称
（The Japan Directory，1885年，86年版より作成）

いて，それぞれに対応する図像を検討する。

① 238番地

図3は238番地に立地したYokohama Fire Brigadeについて，商人録に描かれた建造物を絵図に比定したものである。物見櫓はX状の組み方をほぼそのままの状態で描かれているが，一方では，ないはずの屋根が描かれている。商人録にある二階建ての洋館2軒は，

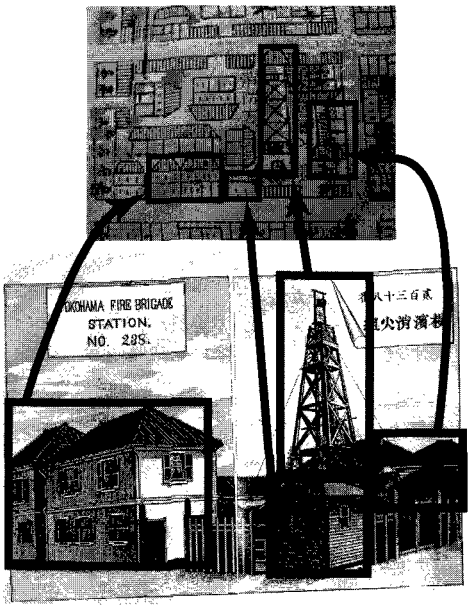



**図3**　238番地における「日本絵入商人録」と「横浜真景一覧図絵」との対応

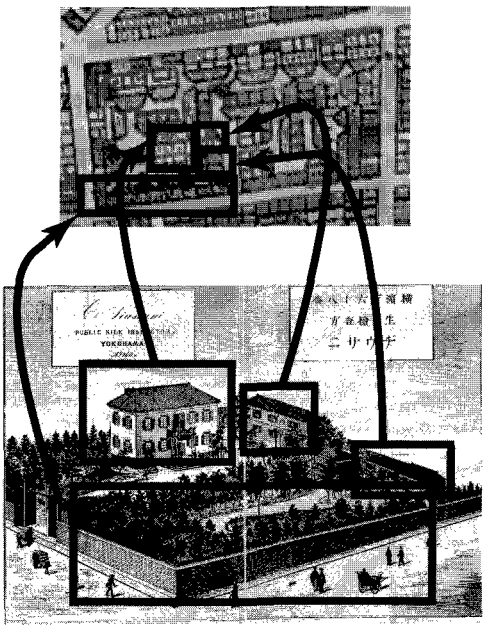


**図5**　168番地における「日本絵入商人録」と「横浜真景一覧図絵」との対応

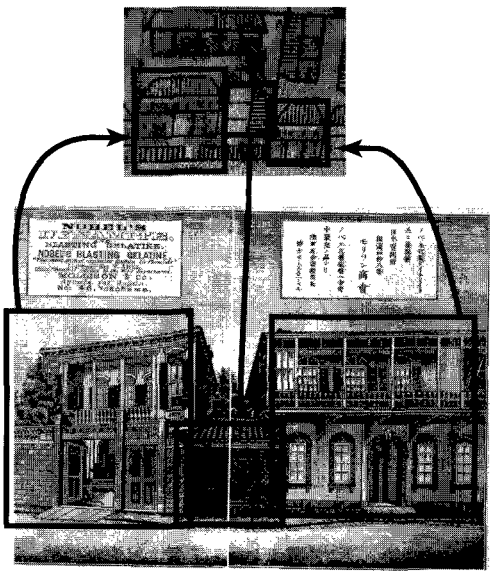


**図4**　48番地における「日本絵入商人録」と「横浜真景一覧図絵」との対応

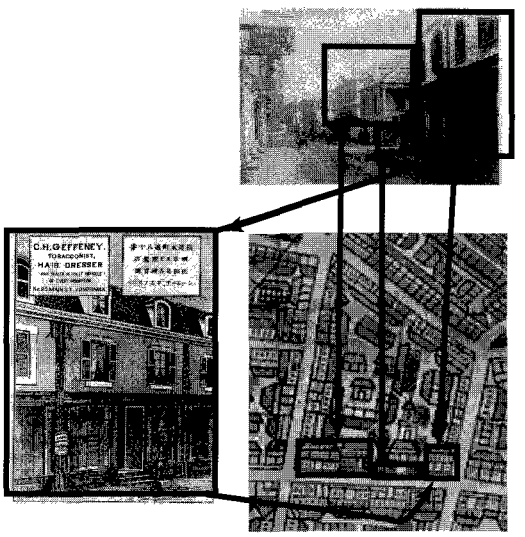



**図6**　80番地における「日本絵入商人録」，彩色写真と「横浜真景一覧図絵」との対応関係

両方とも薄い灰色の着色で，右側の建造物はｇ，左側の建造物はｅのように表現されている。商人録では左側の洋館が切れてしまっているのではっきりしたことは分からないが，左側の方の屋根は三角に近い形をしており，商人録に描かれたものに近い。しかし，商人録では角に位置する物置きのような建造物を，絵図では柵の位置と逆転して，洋館と隣合うようにしている。また商人録の奥に住居とみられる建造物が見られるが，絵図ではｂとして表現されている。

② 48番地

48番地の Mollison & Co. は，商人録で，門の奥に建つ洋館と中央に入り口のある洋館の二つの建造物が掲載されている(図４)。絵図中では両洋館ともにｇの二階部分に窓のような装飾，一階部分は柱のような表現がされているが，商人録では両方とも二階に柱のようなものがあり，絵図とは異なっている。一方で，左側の洋館にある門は，商人録と同様に描かれている。

③ 168番地

168番地の C. Guissani（図５）についてみると，商人録に描かれている建築物がａ，ｂ，ｇの図像で表現されている。ここには商人録で多くの樹木が描かれているが，絵図には樹木を描いた上に黄緑色の着色をしており，詳しく表している。また，塀で囲まれている様子も表現している。

④ 80番地

C. H. Geffeney. については明治23年以前に撮影されたとされる彩色写真[27] との比較ができる(図６)。写真手前の店舗は，絵入り商人録のものと同一の建造物と判断できる。これは絵図内でｇの図像として描かれているが，一階部分が区切られ二階には窓がある様子が，現実に近い形で描かれている。また写真中央付近にある洋館は，有色の建造物だが，絵図中でこれらの建造物と比定できる図像では，ｇの図像で薄く着色がされているが，窓や柱の様子は商人録とは異なっている。80番地は区画が広く，多くの建造物があるが，写真と商人録と対応させることにより，本町通りに面する場所であることと，商人録との比較だけでは確認できなかった周囲の建造物の様子を読みとることができる。

⑤ 164番地付近（現在の中華街東門付近）

ここでは，明治初期に現在の横浜中華街の東門付近から中華街大通り方面をみた彩色版画と，1880年頃の写真に写された建造物を，絵図と比較することができる(図７)。一階部分が店舗のようになっており，二階部分には住居があるという構造がみられる[28]。絵図中でこの付近に描かれているのは，すべてｊの図像である。正確な数は把握しえないが，同様な形態の建造物が林立していることが版画と写真から読み取ることができる。またこの

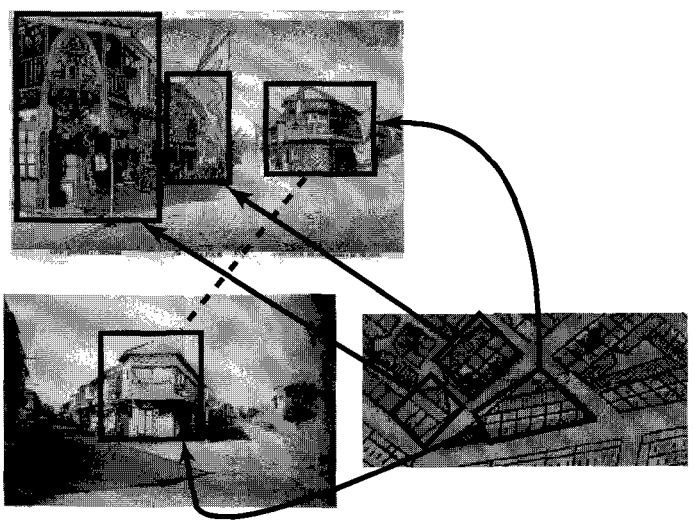


**図７**　164番地付近における彩色絵葉書，彩色写真と「横浜真景一覧図絵」との対応

図像は，旧横浜新田に広く描かれている。

B　日本人町

日本人町では，「横浜諸会社諸商店之図」と彩色写真を用いて検討する。絵図では居留地では通りの名称が示されていないのに対し，日本人町側ではそれぞれの通りの名称が示されている。建造物の一つ一つが整然と描かれており，居留地の景観とは明らかに異なる。

① 前田橋付近

前田橋付近の様子は，山手から撮影された彩色写真[29]を用いて，絵図と対比できる（図8）。元町に描かれたｉの図像を写真と比較すると，その数は適合していない。また元町の一つ一つの建造物の大きさも，絵図ではほぼ同一に描かれている。a′はｉの図像の内部に描かれているが，写真から蔵を表していることがわかる。元町に関する記載はリアルには描かれておらず，類型化されて描かれているといえる。

② 町会所

「横浜諸会社諸商店之図」に掲載された本町１丁目の町会所は，時計台があるランドマーク的な建造物である。絵図に描かれた町会所は，半円状の屋根と時計台が描かれているが，「横浜諸会社諸商店之図」の図像と比べると時計台上部は似ているが，中，下部の窓の形状や壁面の模様は異なっている。また，絵図には樹木が描かれていない（図９）。

「横浜真景一覧図絵」中の図像表現に関するこれまでの分析の結果，居留地では建造物の立地場所，樹木・植生等，実在した建造物に近い形で描かれていたといえる。先に図中から抽出したｅ，ｆ，ｇは洋館の建造物の形態を，ａ，ｃ，ｄは倉庫を表現していた。また居留地164番地付近でみられたｊの図像は，一階部分が店舗，二階が住居になっている建造物を示していた。しかし，日本人町や元町

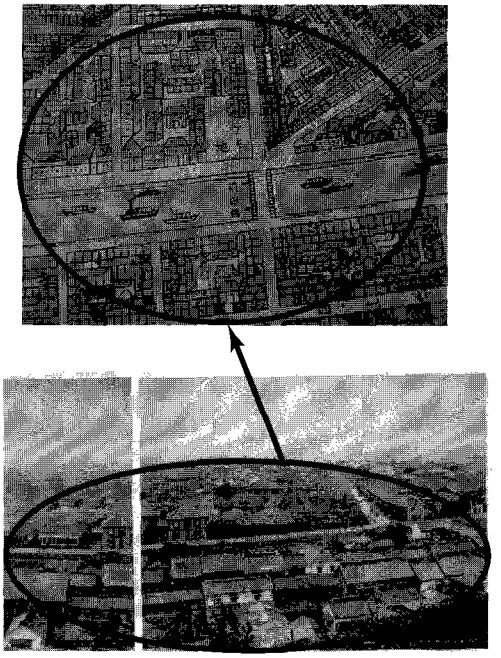


**図８**　前田橋付近における彩色写真と「横浜真景一覧図絵」との対応

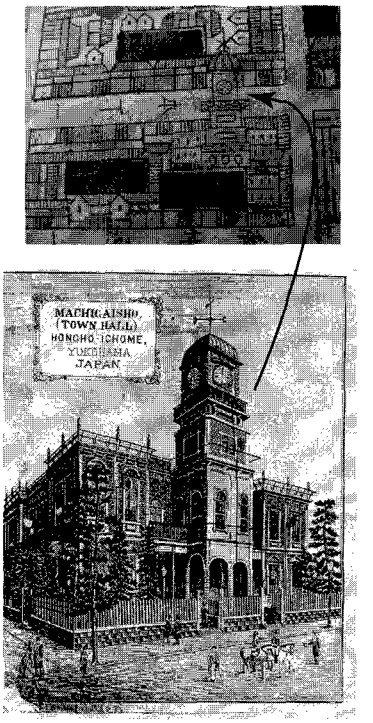



**図９**　本町１丁目の町会所における「横浜真景一覧図絵」と「横浜諸会社諸商店之図」との対応関係

といった日本人が居住するエリアにおいては，ランドマーク的な建造物，例えば煙突や時計台，日本人町に立地した洋館のような建造物以外は，iの図像により続き長屋のように描かれ，実際の家屋・店舗の数とは一致しないものであった。iの図像は，日本人が居住する建造物として類型化されて描かれていた，とみなされるが，他方，bの図像のように住居を示すものとして，絵図の全体に描かれたものもある。居留地においても，実際の色や形状に必ずしも忠実であったとはいえず，ある程度類型化された表現があることは否めない。「横浜真景一覧図絵」は，写実的な絵図であるとはいえないが，それぞれの建造物には認識された違いがあった。それが絵図での描き分けとして表現されたのであろう。

## Ⅳ.「横浜真景一覧図絵」にみる居留地の景観構成

前章での比較から検討した結果,「横浜真景一覧図絵」には，商館・店舗，倉庫・作業所，住居，住居を兼ねた店舗，柵・塀類が区別され，さらに立地する場所によっても描き分けられていたことが明らかになった(図10)。この分類をもとに，横浜居留地全体を区分したものが図11である。区別した数種の図像が混在しており，1つの街区内に様々な建造物が立地していたことがわかる。分類項目ごとの建造物の立地をみていこう。

### (1) 商館・店舗の立地

商館・店舗として認識されたと考えられる形状の図像，つまりe，f，gを抽出し，その分布をみると通りに沿って，居留地全体に広がっていることがわかる。特に本町通り，水町通り，阿波町通りと本村通りに至るまでの前橋町通り，小田原町通りに面した場所で連なっている。また旧横浜新田では，周辺部のみにみられる。

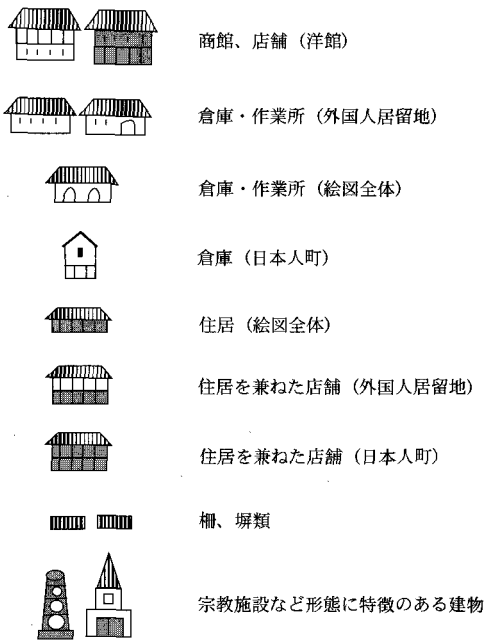



**図10** 「横浜真景一覧図絵」に表現された図像

### (2) 倉庫・作業所の立地

倉庫・作業所として認識された図像には，描き分けの形態に4通りある。a，c，dとa′の図像である。これらのうち，居留地でみられるa，c，dの図像の立地分布をみると，倉庫・作業所は居留地全体に広がっているが，通り沿いに立地するものは少なく，街区の内側に多くみられる。

### (3) 住居を兼ねた店舗の立地

住居を兼ねた店舗として描かれた図像はjである。この図像は，本村通りの旧横浜新田沿いに連立し，旧横浜新田内部にも数多く見られる。一方同通りの旧居留地側には前田橋付近にいくつか見られるにとどまっているのが，対照的である。

### (4) 住居の立地

住居として表現させたと思われるのは，bであるが，この図像は絵図の全体に散在している。大部分が街区の内側に立地している

**図11** 「横浜真景一覧図絵」に描かれた景観

が，旧横浜新田では通りに面して連なっているものもみられる。

以上のように，建造物によって立地するエリアや街区内での立地場所が異なることが明らかとなった。また街路側と街区内部では明確に土地利用が異なり，通り毎にみると以下のような特徴が「横浜真景一覧図絵」に表現されていた，と考えられる。

① 海岸通り

塀に囲まれ，庭が設けられた商館が多い。海側には防砂林を兼ねた街路樹が植えられている。

② 水町通り・本町通り

通り沿いに商館や店舗が軒を連ねている。

③ 本村通り

前田橋付近から小規模な店舗が連なる。81番地付近から左右の景観は対照的になり，旧居留地側では商館が立地する。

④ 加賀町通り

通り沿いに商館や店舗，倉庫や作業所がみられる。

⑤ 前橋町通り・小田原町通り

海岸通りから本村通りの間に，商館や店舗が連なる。本村通りから加賀町通りの間には，住居を兼ねた店舗や住居が連なる。

⑥ 薩摩町通り

海岸通りから本町通りの間では，北側に塀に囲まれ樹木の茂る街区，南側には商館が連なる。本村通りから公園側では倉庫や作業所が多くみられる。

## V. むすびにかえて

本研究では，1891年刊行の「横浜真景一覧図絵」という絵図を用いて，同時期の銅版画や写真などと比較検討し，絵図中のコードを読み取ることにより，横浜外国人居留地の土地利用の状況を解明することを目的とした。その結果，以下のことが明らかになった。

(1)「横浜真景一覧図絵」の内容を銅版画や写真などの資料と対応させたところ，居留地の

街路・建造物については当時の景観の状態を反映しているものと読解できる。

(2)「横浜真景一覧図絵」が1891年段階の居留地の景観を反映していると仮定すると，①旧居留地に広がる商館や店舗といった商業的土地利用，②旧横浜新田に広がる住居をかねた小規模店舗と住居，③新埋立居留地の倉庫群といった地区ごとの景観の特質が読みとれる。また，街路側と街路の内部では立地する建造物が明らかに異なっている。

(3)絵図から見えてきた景観から，一つの街区内に複数の用途の違う建造物の並存が確認できる。

開港時，砂州部分のみであった居留地は，居留民の要求により新田や沼が埋め立てられ，山手を居留地に編入し，下水道や電信等のライフラインを整備し，その形をつくりあげていった。居留民数は幕末の大火や世界的不況，明治維新等で減少するものの，徐々にその数を増やしていき，1890年前後では5000人足らずで安定する。しかし1894年の日清戦争勃発時には居留民の過半数をしめていた中国人数が激減し，戦後，居留地撤廃までに居留民数は回復する。開港後30年余り経過した1891年という年は，居留地としてハード面の整備が完了しており，居留民数も安定していた年で，居留地発展のピークを形成した時期であった。

本稿では，1891年という時点の景観を解明してきた。しかし冒頭でも述べたように，横浜は急速に都市として発展していくため，その形成のプロセスを検討する必要がある。今回の成果を踏まえ，1891年の居留地の景観がいつ頃どのようにできてきたのか，その形成過程を明らかにすること，今回明らかとなった建造物が実際にどのように利用されていたのかを解明すること，以上を今後の課題としたい。

**〔付記〕**

絵図の撮影にあたり三井文庫，横浜の絵図資料調査には横浜開港資料館の皆様に御協力をいただきました。また本稿作成まで，國學院大学文学部地理学教室，専修大学地理学教室の諸先生方，院生諸氏には多くの御指摘，御指導を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

なお，本稿は専修大学に1999年度提出した修士論文に，加筆・修正したものであり，その骨子は2000年度歴史地理学会島原大会にて発表した。

**〔注〕**

1) 作者不明「武州横浜開港見分之図」，安政6年（1859）刊，神戸市立博物館蔵。
2) 尾崎冨五郎「横浜真景一覧図絵」，明治24年（1891）刊，三井文庫蔵。
3) 藤岡ひろ子「外国人居留地の構造－横浜と神戸－」，歴史地理学157，1992，58～84頁。
4) 尹正淑「神戸居留地の都心への発達過程」，史林72-4，1989，74～109頁。
5) 開港場は外国人が貿易や商売をし，居住すること，開市場では商売のために借家に住むことが想定されていた。
6) 山脇啓造『近代日本と外国人労働者－1890年代後半と1920年代前半における中国人・朝鮮人労働者問題』，明石書店，1994，301頁，斯波義信『華僑』，岩波新書，1995，232頁，沼田次郎「長崎とオランダ」『出島図－その景観と変遷』，長崎市，1987，237～240頁。
7) 長崎県編『長崎県史対外交渉編』，長崎県，1986，789～861頁，高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』，東大出版会，1993，274～275頁。
8) 函館区役所編『函館区史』，名著出版，1973復刻（1911），232～234頁。
9) 『兵庫県史第5巻』，1980，828～843頁。
10) 大阪府編『大阪百年史』，1968，24～25頁。
11) 東京都百年史編集委員会編『東京百年史　第二巻』，1972，109～132頁。
12) 新潟県編『新潟県史　通史編5近世三』，1988，719～737頁。
13) 齋藤多喜夫「横浜居留地の成立」『近代都市形

成史比較研究　横浜と上海』，横浜開港資料館，1995，133～166頁。

14) 横浜図の詳細については別稿を準備中。

15) 齋藤多喜夫「横浜開港名所図会－「横浜土産」にみる開港期の横浜－」，たまくす第3号，1985，15頁。

16) 五雲亭貞秀（1807～不詳）。本名橋本兼次郎，画姓は歌川，玉蘭斎，五雲亭等と号した。横浜浮世絵の第一人者。横浜開港資料館編『よこはま人物伝　歴史を彩った50人』，神奈川新聞社かなしん出版，1995，194～197頁。

17) 高島計之画「横浜御開地明細之全図」，安政6（1859）年刊，三井文庫蔵，や，歌川（一川）芳員画「御開港横浜之図」，文久2（1862）年刊，三井文庫蔵。

18) R. H. ブラントン，Plan OF THE SETTLEMENT OF YOKOHAMA，明治3年（1870）刊，神奈川県立図書館蔵。Brunton, Richard Henry, 1841～1901, イギリス人建築土木技師。

19) 石井光太郎「出版物をとおしてみた横浜の半世紀九　横浜の近代的地図」，有隣21，1969，4頁。

20) Japan　Directory とは戦前に横浜，神戸，長崎や香港等の開港場で発行された英文の年鑑である。タイトルは同一ではないが，1861～1941年までの各年の Directory の存在が確認されている。

21) 詳細については，石橋正子「錦誠堂尾崎冨五郎出版目録（稿）－幕末明治初期のある出版人の軌跡」，出版研究23，1993，227～253頁。

22) 佐々木については，横田洋一「横浜銅板畫について－その特質と明治の印刷文化」『横浜銅板畫』，有隣堂，1982，167～190頁に詳しい。

23) 前掲22)。

24) ステンションと，その内の「鉄道扱所」「荷物扱所」にある12の建造物と周辺の貨物，燈台局内の白い建造物，伊勢山太神宮の本殿脇の建造物と塀等，子ノ神の建造物，日本人町内の「ノゲー」近くの白い建造物，税関近くの白い建造物，横須賀一覧図絵中の「十船具所」，石炭庫の建造物，師範学校内の建造物，日本人町の海岸沿いに建つ建造物，本丁通り三丁目の建造物，元丁二町目の建造物，居留地一番地の建造物で斜方観がみられる。

25) 先に述べたように，「横浜真景一覧図絵」には凡例や注がみられない。付図「横須賀一覧図絵」には注がみられるが，それぞれの番号を付し名称を示すのみで，横浜の絵図に採用することはできない。

26) 松信太助『横浜近代史総合年表』，有隣堂，1989，991＋137頁。

27) 横浜開港資料館編『彩色アルバム明治の日本－横浜写真の世界』，有隣堂，1990，247頁，によると，メインストリートを80番地付近から山手方向に見たもので，撮影は周りの建造物の建築状況から判断して明治23年以前のものとされている。

28) 山下清海『東南アジアのチャイナタウン』，古今書院，1987，201頁によると，このような構造は中国人集住地区でよくみられる建造物であるという。

29) 前掲27)によると，元町百段上から撮影されたもので，幕末からパノラマ写真が撮影されることが多い，いわば関内居留地の定点観測地であるという。撮影年は明治23年頃と推定されている。

Landscape of Yokohama's Foreign Settlement at the end of the Nineteenth Century: An Analysis of *Yokohama Shinkei Ichiran Zue*

OTOBE, Junko

This paper aims to clarify the land use of Yokohama's Foreign Settlement by analyzing *Yokohama Shinkei Ichiran Zue* (Yokohama Authentic Pictorial Map) depicted in 1891 together with copperplate prints and photographs of those days. By comparing the pictorial map with copperplate prints and photographs, it is clear that the pictorial map reflects the land use of those days as far as streets and buildings in the foreign settlement are concerned. Assuming that *Yokohama Shinkei Ichiran Zue* reflects the land use of the foreign settlement in 1891, three districts are identified: Offices of foreign merchants and shops occupying the former foreign settlement; houses and small shops with residence in the former Yokohama Shinden; and warehouses and storehouses in the new reclaimed settlement. It is also clear that the buildings facing the streets and those away from the street and inside the blocks were used for different purposes.

The landscape depicted in the pictorial map suggests that several buildings utilized for different purposes coexisted side by side in the same areas. Since Yokohama developed rapidly into a city during thirty years after the port was opened to foreign ships for trade, it is necessary to take the formation process into consideration. In order to clarify when and how the landscape of Yokohama as was depicted in the 1891 map had been formed, detailed analysis of the use of buildings will be required.

**Key words:** *Yokohama Shinkei Ichiran Zue,* Tomigoro Ozaki, Yokohama's Foreign Settlement, Landscape, At the end of the Nineteenth Century